

## 進化する技術と常に向き合い組込みの一線で活躍 受託と自社開発の2軸を目指し展開中

株式会社ステップワン(本社:兵庫県神戸市)は1990年、“高品質ソフトウェアの提供”を目標に神戸市に創業。26年の長きにわたり組込み分野の一線で活躍を続けている。ソフトウェア開発に加え、ツールやシステムの自社開発をもう一つの軸とするべく展開中だ。JASA会員としては東京支社の関東支部から近畿支部へ移り、新たに交流を深めて行こうとする。9月からの27期目を前にした同社の現状を代表取締役社長・吉本裕行氏に伺った。

### 多分野でのソフト開発事業を軸に事業拡大

ITやエレクトロニクス技術の進化は、すさまじく早い。一世代前に描いた未来はすでに実現されていて、最終製品で初めて技術にふれる消費者はその進化に驚嘆するばかりだが、設計開発にかかる企業は技術の進化と常に向き合い、知識や対応力を備えていくことが求められる。

そうした中で、ステップワンは創業から組込み分野にどっしりと腰を落ち着け、ソフトウェア開発を軸に四半世紀を超える長きにわたり一線で活躍してきた会社だ。業界に身を置く企業にとってはその“秘訣”に関心が集まりそうだが、それは3年ごとに策定する中期計画に垣間見えそうだ。「一貫した目標は強い会社にするということ」と代表取締役・吉本裕行社長は言う。強さの定義はその時々で異なるが、そのために常に進化する技術との接点を確保しようとする業務姿勢がある。ひとつの企業に偏らない多方面のアプリケーション分野でのソフトウェア開発から、半導体エンジニアリングやハードウェア、ツールやシステムの自社開発といった多彩な展開だ。

創業から業務の主軸とするソフトウェア開発では、カーエレクトロニクスやセ

キュリティ、今後ますますニーズが高まるであろうホームネットワークやメディカルなどの分野で開発実績を拡大している。売上の9割を占める事業だ。分野を特定しないことのプラス面について、吉本氏は次のように語る。「専門特化すればそれだけ専門知識に強くなりますが、違う分野で出てきた新しい技術に接する機会がなくなります。カテゴリを分散すればその心配がなく、例えばカーチャージで用いた技術をメディカルに応用することもできるし、ある分野でその技術が話題になっても経験していれば対応ができます」。半導体エンジニアリング事業に着手しているのも、新しい技術を早く知るメリットに通じることから。これまででもUSBやZigBeeなどの技術にも対応した実績を持つ。

### 技術力を応用した自社開発でもう一つの軸を持つ

ツールやシステムの自社開発は、もう一方の軸としてソフトウェア開発との両輪を目指す。ツール開発では、薬学系を対象としたライフサイエンスソリューションを推進する。京都大学の教授と連携して開発販売しているもので、スマホ用アプリとしてアップルやグーグルのス



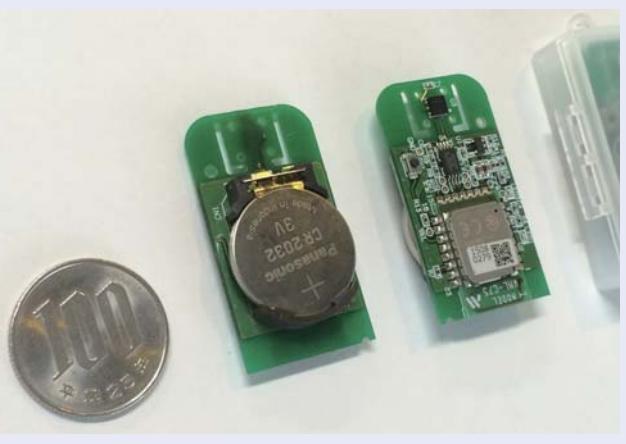
代表取締役社長 吉本 裕行氏

トアからダウンロード購入できる。

『ライフサイエンス 生き字引』は、ライフサイエンス用語の英和・和英の専門辞書。大学教授が中心となった“ライフサイエンス辞書プロジェクト”で開発が進む辞書データをスマホやタブレットで利用できるようにした。医学、薬学、生命科学に必要な専門用語を網羅する。『デジ薬理』は、薬剤師の国家試験科目にある薬理の知識が手軽に学べるツールで、過去に出題された医薬品を網羅し、特徴や適応症、作用機序など必要な情報が得られる。いずれも、先生方が温めていたアイデアを同社で開発したものだ。利用者も限られ爆発的に売れるものではないが、「売り上げ以上に自社製品を持っていることが新しいお客様との出会いになるのを続けている」(吉本氏)

システム開発では、透明や半透明容器の表面のキズなど劣化を1秒足らずで解析し検出する外観検査システムなどは、

▼ステップワンが開発したワイヤレス温湿度口ガーナ。輸送中の温湿度管理など流通系でのニーズが高い。



同社の技術応用力を示す一例と言える。また「今着手している製品」と吉本氏が紹介するのは、ワイヤレスの温湿度口ガーナ。小型軽量、極低電力のBLE(Bluetooth Low Energy)通信でスマホとデータ連携できる。商社と連携して進めているもので、すでに3000台ほど出荷済み。輸送中での温度管理ニーズが高く、流通関係ではOEMの話もあると言う。データロガーは農業分野でのニーズもあり、CO<sub>2</sub>濃度測定も可能なタイプを準備中とのことで、こちらも事業の拡大に期待が持てそうだ。

### 「学生には体験する場を与え、失敗を経験してもらいたい」

同社は9月から27期目に入るが、今までに新たな中期計画を策定中。そんな中でも、毎年新卒社員を採用していることから「技術力向上」は恒常的な計画になりそうだ。

「内定した学生が入社までに勉強しようにも、推奨できるものがない。それで、私自身が書き溜めていたものを社員にまとめ直してもらったら“組込みソフト入門”と言えるような資料になった。ハードに近いところのソフトや、抵抗器のカラーコードの読み方といった内容ですが、それを新入社員に渡すと言ったら社員が“確かに大切な内容だが今そんな仕事は少ない”と言う。今の仕事の中で知

識を深める対象の違いを感じて、現場を熟知している特定の社員の知識をいかに一般化できるか常に考えなければお客様が満足するソフト開発ができないとあらためて思った。」(吉本氏)。

悩ましいテーマだが、技術の向上には組込みの世界を体験してもらうことが第一。昨年は大学生を対象に教育セミナーを実施している。「組込みソフトに少しでも興味を持ち、体験してもらう場として実施しました。4回行って最後は定員以上の申込みがあった。採用が目的ではなかったが、受講して、業界で仕事をしたいと入社を希望する学生もいます」と吉本氏は手応えを語る。

交友の広さもあり、教育関係者から“組込みの仕事に就くには何を学ばせると良いか”とアドバイスを求められることもある。吉本氏の返事は「英語」。求められている回答ではないが、としつつ「きちんと話ができたり人の応対ができたり、基礎的なことが重要だという意味で。本当は実際にモノを動かす経験ができるいいのですが」。経験してもらいたいのは“動かない失敗”。“失敗して“なぜ、どうして?”と悩み考えることから育っていくものです」。失敗を経験する—これから組込み業界を目指す人には金言だろう。

この3年は、社員が品質・教育・技術・生産性のいずれかのグループで課外活動を促進。技術向上に自律型ロボット競

技のマイクロマウス競技会への参加もあった。これも中期計画の一環だが、こうした活動は学びや気づきが深まるものだ。

### 自社で研究会の事務局も代行 JASAでも会員との積極交流を

会社としても、神戸市の民・学・産・行政によるコンソーシアム「地域ICT推進協議会(COPLI)」に参加し、交流や地域貢献を深める活動を続ける。同社がブランディングの一環に行う地元の花火大会スポンサーや学園祭の協賛なども、地域貢献のひとつとも言えるだろう。

また年4回実施する「MIT(Modern Innovative Technology)研究会」は、同社が事務局を努める勉強会だ。「以前参加していた研究会が楽しくて。会に關係していた大学の先生と再会したとき話題になり、また始めませんかと水を向いた」(吉本氏)ことをきっかけに、すでに9年以上続けられてきた。さまざまな分野から講師を招き参加者が楽しくディスカッションする場で、ディープラーニングやモダンデザイン、昆虫、室町期山水画、レスキュー・ロボットなどテーマも多彩に、知的好奇心を刺激しながら交流を図っている。

JASAもこうした交流の場のひとつとなる。関東支部から近畿支部会員へ移ったところで、これまでWGに参加するなど会員企業との交流を深めてきた。改めて近畿支部でもその広がりを期待している。